紀伊徳川家西園の眺望行為に関する研究

A Research on an Act of Viewing in Saien Garden of the Kii Clan

李 偉*

Wei LI

Abstract : This paper examines the characteristic of the view in the space construction of the Saien garden and the meaning of the view in Daimyo's garden in Edo city. It is resolved through the clarification of the location and creation of the views in Saien garden of the Kii Clan during Edo period. Saien garden makes use of the natural topography, in its space construction, the design of the view is strongly emphasized. The view from Bougakutei to Mt. Fuji is a typical example. The design is to cut the scene of Mt. Fuji through the frame of window. And this scenery design reminds us an ideal Chinese poetry expression. The act of viewing then changes from the stationary action of merely watching a picture to the action of utilizing the natural space to create scenery.

Keywords: *view, Saien Garden, Daimyo Garden, Edo, Bougakutei, scenery design*

キーワード：眺望、西園、大名庭園、江戸、望嶽亭、景観操作

1. はじめに

西園は、江戸の紀州藩邸の中屋敷（赤坂邸）に設けられた庭園であり、明治6年（1873）に仮皇居となり¹⁾、現在の迎賓館の敷地（元赤坂の赤坂御用地）がそれに当たる。寛永9年（1632）7月、紀伊徳川家初代、徳川頼宣（藩主在職 1619－1667）は江戸の赤坂に邸を拝領し、その後庭園の造営が開始された²⁾。そして万治4年（1661）に、將軍家の庭師である山本道勾と鎌田庭雲を召して庭園の改造を行い³⁾、天和、承応、元禄年間に屋敷を拝領しつつ、敷地は徐々に増えていった⁴⁾。六代藩主徳川宗直（藩主在職 1716－1757）の時代に園内の増築が行われ、大成される運びとなった⁵⁾。赤坂邸は天保13年（1842）には十四万五千坪余と記録され、最終的には東は赤坂、西は青山、北は四谷に及ぶ広大な地域を占めるほどになっていた。小石川後楽園、戸山荘とともに江戸三名園と称され、質的にも規模的にも江戸屈指の大名庭園である。

西園を対象とした庭園史研究は1990年代前後から行われるようになった。赤坂邸内の建物と付属施設の変遷（高橋）⁶⁾、西園と鷹狩りの関係や西園と庭園文学との関係（今橋）⁷⁾、西園の絵図や谷文晁の『青山園莊圖藁』を用いた景観に関する紹介（榊原）⁸⁾や、近年では「赤坂御庭図」や谷文晁の「赤坂庭園五十八勝図」をもとに西園の景観に関する考察も試み始められている（近藤・安永）⁹⁾。中でも、天保期に描かれた「赤坂全図一分計元図」をもとに、御殿部分の平面構成と庭園との関係を考察した研究（中村ほか）¹⁰⁾は、御殿の諸室からは南西に展開する庭園への眺望、また庭園から仰ぎ見る建物への眺望が好まれていたとの指摘は重要である。これらの先行研究によって、赤坂邸内の建物の特徴や建物と庭園との関係は徐々に明白になってきた。しかし、分析は絵図に集中しており、庭園全体の景観の特徴はまだ明らかにされていない。

紀伊藩の歴代藩主の殿邸沿革を記録した『南紀徳川史』に「天然之地形に資して自然の風景をなし一つも人為に出る處なく」と

記され¹¹⁾、西園は人為を好まず、天然の地形に順応して造園されたと強調されている。後の時代の文献において西園のこういった「自然の風景」への執着表現が貫かれていた。確かに自然景観は庭園を特徴付ける重要なポイントであるが、しかし西園は「一つも人為に出る處なく」ではなかった。自然環境を利用した作為的な眺望景観が園内に点々と創られていた。本稿では、園内から外部を臨む行為を「眺望行為」と規定し、その要因として①視点となる建物の指定、②眺望対象となる自然景観の選別、③視点と眺望対象の二者をつなげる庭園景観の操作の三点をあげ、西園の眺望行為の特徴を考察していく。

2. 西園の地形

まず西園の地形を地図で確認してみよう。既往論文で明らかのように、赤坂邸の江戸時代後期の境域ができるのは元禄頃である¹²⁾。そして江戸後期の境域はほぼ異同なく明治時代の赤坂御用地のそれへと継承されていると考えてよい。明治期に作られた国土地理院1/10000地形図「新宿」で西園の地形を確認すると、西園敷地の西南部分には武蔵野洪積台地の一部で、標高20－30mの台地が標示されている。地形に沿って築山があり、谷の部分に池が標示される。このように、西園は起伏の富んだ自然の地形に恵まれている。この地形は次のように認識されていた。

尾張藩士の土居清健は、園遊記「鏡花水月」（文政11・1828年）に西園は三面に山に囲まれ、南には池に臨む起伏の富んだ地形を持っていて、都市の紛華がすぐそばにあっても、自ずから幽閑の境地を作り出して、風花雪月を清覧する、とその特徴を記した¹³⁾。これはいわば喧噪な都市空間がすぐそばにありながら、自然を堪能しようとする「市中の山居」という理想郷であり、それが西園の地形や自然環境によって醸し出されているという。

そして自ら生活した幕末の西園を思い出し、その景観を記録したものに紀州藩の旧藩士馬場逸齋の「紫園二十五絶」（明治16・1883年）がある。この文中において逸齋は西園の地形に関して、

*国際日本文化研究センター

東京の最も高い場所に位置し、園内には深山幽谷を思わせるような複雑な地形を持っていて、これらの地形を生かした天然の景観を有していると評した¹⁴⁾。言い換えれば、西園は、このような複雑な地形や天然の景観を活かして造園され、それらの自然景観を庭園の中で観賞できるように工夫されていたのである。

いったい、起伏の富んだ地形において、いかなる眺望景観が創出され、「市中の山居」という理想郷を言わせるほどの雰囲気を作り出していったであろうか。以下、当時の紀行や詩集などを手掛りに、西園の眺望景観の全体像にアプローチしていきたい。

3. 西園の眺望景観

西園は園内の「自然」環境に止まらず、園外への眺望のため、複数の楼閣や亭を積極的に造っていた。「紫園二十五絶」では、西園内において「台や樹を築造して遠望を図り、亭を設けて休憩所とし、座敷から綺麗な山並みを観賞でき、樹の形を良くしそれを亭の窓にした」¹⁵⁾ という記述がある。自然景観を遠望するために、小高い地形を利用した景観の眺望が展開されていたことがわかる。先述した地形図からも、西南部の標高 30m の高い地点に「望嶽亭」、「望雲亭」、北部の御殿南の台地に「幽篁床」、「洗心亭」、「含暉亭」を確認することができる。その位置と文献を合わせて考えると、西園の眺望の全体像は表 1 のようにまとめられる。

表－1 西園の眺望地点と眺望対象表

眺望地点	眺望対象	出典
九思斎	芝浦品海、風帆や鳥、房総総峰	西苑記（弘化 2・1845 年）
香陰亭	月色、花影	西苑記（弘化 2・1845 年）
望雲亭	青山の村々、茅葺の家、蕭條とあがる煙、四方の風景	紀乃柴折（文政 11・1828 年）
	権田原、青山の邊	鏡花水月（文政 11・1828 年）
幽篁床	邸外の人家	西園賞詩十六首（享和元・1801 年）
	富士の根	鏡花水月（文政 11・1828 年）
	富士の高根、そここの山々	紀乃柴折（文政 11・1828 年）
洗心亭	冬かれの野やまや松をちから草	紀乃柴折（文政 11・1828 年）
含暉亭	雁、雪の花園	西苑図記録（寛政 2・1790 年）
	田畑、水鳥、民の籠	紀乃柴折（文政 11・1828 年）
鳳鳴閣	四方の遠山	紀乃柴折（文政 11・1828 年）
望嶽亭	富士山	嘉陵紀行（文政 11・1828 年）他

まず、儒者菊池純の『西苑記』（弘化 2・1845 年）には「九思斎」と「香陰亭」の眺望が記されている。内苑の書斎「九思斎」の後ろに層楼があって、そこからの眺望は老楓の赤と古松の緑が互いに映し合っていて、地勢が高いため、木の梢をまっすぐ見る事ができる。東南に縹渺たる雲がかかっていて、木を超えて十里も見渡せる。芝浦品川、帆船や鳥に霏がかかって、房総連峰の色は水墨画のような奇観であると賞賛された¹⁶⁾。そして「香陰亭」からは桜の木の下での優雅な月見の風景が描かれている¹⁷⁾。遠方の景観を記述するというより水墨画を思わせるような風景の表現である。遠方の絶景はこのような漢詩文的な意境を介して体得されていた。

次に、「望雲亭」の眺望は、「鏡花水月」と「紀乃柴折」（文政 11・1828 年）の二つの園記で確認できる。小高い土を盛り、芝草を植え、石の階段を造り、その上に亭が立っている。亭より西のほう、権田原、青山の邊が遥かに見渡せる¹⁸⁾。岡に登って眺望すれば、青山の村々、茅葺の家、ひっそりとあがる煙が、林と夕日の間で点綴し、中国の文人画家の倪瓚や黄公望の描かれた幽邃な山境の雰囲気によく似ている¹⁹⁾。倪瓚と黄公望は元末の著名な水墨山水画家であり、彼らの作品の雰囲気に似ているということは、「望雲亭」の眺望景観に遠近関係、景色の濃淡まで追及され、実際の風景より絵画を観賞するような風景表現がここでも確認で

きる。幽邃な山境の表現は西園の市中の山居という全体的雰囲気を出させる描写である。ここで注目したいのは、望雲亭にしながら、亭を回転させ、四方の風景を心ゆくまで一覽できる非常に珍しいものだという描写である²⁰⁾。人工的にできた施設の中からの自然観賞は自然の景観を超越する理想境の表現過程でもあり、観賞目的から出発した眺望行為は、やがて反自然的な「偏奇」としていくところが大名庭園の特徴の一つだと考えられる。

「幽篁床」の眺望景観に関して、林述齋は「西園賞詩十六首」（享和元・1801 年）で漢詩を詠み、まばらな枝を通して邸外の家屋など園外の風景をすくえてみえるという²¹⁾。古い唐鐘や「疎々」といった枝のような侘びた表現は、庭園の雰囲気と一致している。また西は周囲の山から富士山までの山岳が眺められ、その眺望は一段と素晴らしい²²⁾。富士山の眺望は、「西に臨めば、富士山の根元、時の知らない雪が頂にあって、遠望その上ない絶景だ」と絶賛した²³⁾。富士山の美しさは、江戸人感嘆させるだけの何物にも換えられない価値があった。同様に「洗心亭」²⁴⁾、「含暉亭」²⁵⁾、「鳳鳴閣」²⁶⁾からも周囲の山々を眺望できるが、このうち特徴的なのは「望嶽亭」からの富士山眺望である。

4. 「望嶽亭」の富士山眺望

「望嶽亭」の眺望に関しては、まず、寛永 2 年（1790）の「西園図記録」に、「山上にあり、圓窓より富嶽正に亭座に入る。恰も壁間畫幅を懸るに似たり。富士見御腰掛ともいう²⁷⁾」という記述があるように、この亭は園外景としての富士山を観賞するための装置であった。富士山を眺められる位置に望嶽亭という腰掛を設け、窓の中に富士山が入るように設計されたことがわかる。それはまるで壁の上に掛かる画幅のようだという表現から「望嶽亭」の眺望にもまた絵画を観賞する心持が読み取れる。

図－1 望嶽亭とその周辺の様子
（谷文晁筆 「青山園莊圖藁」『国華』（1148）所収）

谷文晁の「青山園莊圖藁」（寛政 9・1797 年）では「望嶽亭」が立体的に描かれている（図－1）。画面右に比較的小高い丘陵があり、その斜面には多くの松が茂る。山に上がる道に沿って頂上まで登り切ったと思われる地点に、あずまが描かれており、そこに「望嶽亭」との墨書がある。「望嶽亭」は園内の小高い山の上に位置する御茶屋であり、周囲の木々に囲まれており、自然の野趣を感じ取れる。野趣を体感しながらの富士山眺望であったと言えよう。

さらに時代を下るが、文政 11 年（1828）の記述にも同じく、望嶽亭から西をふりかえてみると、「松が両側から寄りかかって、その梢の間から富士山が見えるという。だが残念なことに今日は曇りで見えない。亭の前の根笹の中から筧を渡して、石の盤に水が注がれるようになっている。そのかたわらに大変古い石の灯籠がある」²⁸⁾。この記述は清水徳川家の村尾正靖（1759－1841）

の『嘉陵紀行』に記録されている。

村尾正靖は嘉陵子と号し、姓は村尾、名は正靖、清水家に仕えた周防岩国の武士である。旅行を好み、特に名所旧跡を訪れてその地の沿革変遷を尋ね、江戸附近の山河を歩き回って、自らその風景を詩歌に詠み、絵画に描いている。『嘉陵紀行』の中にある「紀伊赤坂御屋形御庭の記」は、西園を見学した後の見聞記である。それには「望嶽亭窓中望富士図」(図-2)と題した絵が描かれている。起伏の多い山道に草が生え、画面左下には、望嶽亭のすぐ傍に立っていると考えられる灯籠が描かれている。絵に描かれているように、谷をなす地形の左右の山麓に聳え立つ古い松が額縁のようになり、山頂に雪が積もっている富士山がその中に納められている。

図-2 望嶽亭の窓からの富士眺望
(村尾正靖 「望嶽亭窓中望富士図」『嘉陵紀行』所収より)

さらに図面左上の正靖の賛を読むと、細い山道を登って亭に至るまで雲がかかるほどに高い木が茂っていて、まるで自分が神仙の世界にいるようで、古い松の木が西の窓の月に翠を献じ、谷口が門になって富士山を招き寄せるような景観であるという²⁹⁾。その日は曇りであるため富士山が見えなかったが、この図は「真景」であり、想像で描かれた図ではないと正靖が強調している。

望嶽亭は山頂にあって、亭に至るまでの山道は鬱蒼とした高い木が植えられ、神仙境にいるような気分になったことから、園内の野趣に富んだ全体的な雰囲気とよく合うような景観を作り上げたと考えられる。そして、亭に入り、閉ざされた視野を突然開いて、富士山の遠望絶景が観賞できた。絵のタイトルからも「窓」の存在が強調されたように、富士山を観賞するために、望嶽亭内に窓を設けられた。さらに古い松の木で作られた天然の額縁を通して富士山を遠望するというような「窓」が加えられ、「松の木」との二重の額縁効果を演出したのである。このように、西園に二重の額縁を設け、園外の富士山を取り込んで観賞するという眺望は、あたかも絵画を観賞する際の額縁効果と同じである。額縁によって周囲の景観を遮蔽して、富士山を突出させる効果がもたされる。自然の野趣が強い西園の中は、このような作為的な「額縁」によって明確に境界づけられ、その中における富士山の遠望は理想化された絵画の風景表現である。人間は自然景観を眺望するために、作為的に眺望景観を変形し、非自然化していく過程さえ読みとれる。

その意境は中国唐代の詩人杜甫の「窓含西嶺千秋雪、門泊東吳万里船」の名句を彷彿させる。西嶺の千秋に積もった雪を窓に取り込み、東吳の万里に航行した船が門前に泊まっているという詩である。この詩に因んで、江戸時代の文人が作った多くの漢文では、富士山のことが西嶺と詠まれていた。西園の「望嶽亭」からの眺望は単なる富士山への遠望ではなく、その窓を設けて富士山

を取り入れる手法は中国の唐詩の意境と一致している。

それから正靖の詩を補うかのように、望嶽亭の様子を克明に描いた宮内庁書陵部所蔵の「江戸赤坂邸園全図」がある。この絵図は幕末に描かれた極彩色の西園全図であり、建物の位置はもちろん、植栽や園遊のルートまで細かく記されている。「望嶽亭」は西園の西南部の丘陵に位置し、四畳半の腰掛で、門前に敷石が敷かれ、門に入ると、真正面に西南向きの窓が描かれている。さらに望嶽亭の周囲には多くの松や、亭の近くに石灯籠などが描かれている。この絵図で注目すべきなのは、画面左下、望嶽亭の西南方向に松の木が道をなしているように描かれていることである。西南は富士山が見える方向であることから、富士山の眺望が意識され描かれているのがわかる。

図-3 幕末の望嶽亭(「江戸赤坂邸園全図」より)

『嘉陵紀行』と同じ年に書かれた紀行文「紀乃柴折」と「鏡花水月」にも、「望嶽亭」の記述がある。「紀乃柴折」文政11年(1828)10月11日の条に窓を通して富士山を眺望する手法が記録されている。黒木の門に入ると、小ぢんまりした室があり、ここは望岳亭と呼ばれている。白い藤の軒柱に、黒木を交え、思うままに家を作った。そして、向かいの壁の真中に、縦長い窓がきり開けてあって、戸を押し開けると真正面に、富士山が一面に見える。このような自在の設計に驚くばかりだという³⁰⁾。寛政年間の「西園図記録」とは異なり、丸い窓ではないが、窓からの眺望は見事に引き継がれている。黒木の門や、小室など、一見素朴で装飾の少ない亭が作られているが、すべて富士山を突出させるための道具である。富士山を引き寄せて観賞することによって、亭の景観が一気に豊かになっていく。そして、同じ条に「寐ながら不二引よせてふゆの窓」という句が付されており、家にいながら富士山を身近に引き寄せる窓は、藩主の「臥遊」ともいえるべき理想がはっきり表れているといえよう。どこまでも簡素で自然を大事にする景観表現の中に、富士山を突出させ、自分の領域に引き寄せる景観の操作がなされていたことがわかる。

「鏡花水月」には、「望嶽亭」の雰囲気について以下のように書かれている。「斜めになった山徑に百歩上ると、望嶽亭という御茶屋に到達する。その額は松平定信(「桑名老侯樂翁」)の書である。亭の南方は、谷深く山を巡って、嶺が樹木に覆われる³¹⁾という。起伏の富んだ地勢を利用して景観が創り出されていった。そして「閑雲」、「幽禽の声」、「松の風」などの描写から西園全体的な「市中の山居」の野趣がうかがわれる。このような雰囲気の中で、「心おたやかに、浮世のちりを拂ふに堪たり」理想の境地

が創造されていく。山に登る途中は神仙境のような大木の茂っている「幽閑」の雰囲気を感じさせるが、登り切ったところに視線が一気に開ける景観観賞法は、眺望を園遊の一環として設計し、ダイナミックに展開されるように工夫されていたことが読み取れる。

『西苑記』には、「高い松の木が道の両側に立ち、その道を登って百歩あまり、望嶽亭に至る。亭の西南には密林と幽邃な谷に臨み、亭に座り林の梢をながめると、富士山がそこから突出している。山容は半分ほど露呈し、白い雪が天に届くように聳え立っていて、遠くの山々がおぼろにかすんで画のようだ」³²⁾と記述されている。「連岳」³³⁾すなわち富士山の山頂の形は絵画に匹敵するほどきれいに見えたのであろう。

富士山を眺望するために、山道を百歩ほど上らなければならない。登る途中の景観は聳え立つ松の木である。山頂まで登ること自体は眺望を実現するための必要不可欠の過程であり、その眺望はまた園遊の一環として位置づけられる。つまり視覚だけの観賞ではなく、山風に吹かれ、耳で小鳥のさえずりを聞き、松の匂いを嗅ぎながら登っていく、こういった五感を駆使しての園遊において、富士山の眺望はクライマックスの一場面である。長い道のりを経てようやく見られる富士山の遠望は格別にすばらしいと思わせるように、心理的な期待感を高めるべく設計されたのである。

亭に上ると、そこからの富士山はほどよく引き出され、背景に霞んだ遠くの山々があって、まるで水墨画に描かれている景観である。『西苑記』にも富士山への眺望景観を絵画的に捉えられる傾向が見られる。自然の地形を利用した眺望であるが、この富士山は写実に見えても、デザインされた景観である。言い換えれば、富士山への眺望は、西園内部の景観操作と意識した美意識と関連している。眺望で得られた風景は純粹の風景ではなく、規範的風景のデザインである。その隠された出発点となるのは漢詩文からのイメージであり、絵画的な表現である。江戸時代の大名たちが理想とした庭園景観は、山水画や漢詩文の意境を介して身につけていたと思われる。

5. おわりに

本研究は西園での眺望行為の考察を通じて、自然景観をめぐる庭園景観の構成手法を明らかにした。西園は豊かな自然地形を活かし、「市中の山居」を思わせる景観を構成した。また高い地形を利用して楼閣や亭を建て、眺望行為を試みる建物の措定が行われているように、その空間構成に眺望の意匠が強く込められていた。

西園の眺望の特徴は「望嶽亭」から富士山の眺望に代表される。その特徴は視覚観賞の域を越え、五感を使った園遊体験の一環として設計されたところにある。更に特筆すべきなのは、山頂からの富士山の遠望は遮ることのないパノラマ式の眺望ではなく、窓と松の木による二重の「額縁」に富士山を取り入れる景観操作である。これは単純な風景を見晴らす行為ではなく、絵画的に景観を構成する傾向が強い。観念的な漢詩文の表現を再現する意味合いが色濃く読み取れる一方、眺望対象である富士山を突出させるための表現であり、園外景観の特殊化を図っていたと考えられる。

「天然之地形に資して自然の風景をなし一つも人為に出る處なく」と『南紀徳川史』の記述で規定されていた西園のイメージではあったが、そこには人間の知と想像力によって「構図」された絵画的な景観表現が加えられており、自然への眺望行為には景観を操作する過程がみられる。

謝辞：本研究を進めるにあたり、貴重な史料を提供していただいた宮内庁書陵部と国文学研究資料館に感謝いたします。

補注

- 1) 小澤圭次郎(1915)：明治庭園記：日本園藝研究会，129
- 2) 堀内信(1930)：南紀徳川史 168巻：清文堂，99
七月賜邸於赤阪。
- 3) 李梅溪(1671-1682の間)：南龍言行録 全：国史研究会(1915)，69
- 4) 前掲注2
- 5) 前掲注2，873
- 6) 高橋克伸(1989)：紀州藩江戸中屋敷について：和歌山市立博物館研究紀要(4)：和歌山市立博物館，50-61
- 7) 今橋理子(1995)：江戸の花鳥画—博物学をめぐる文化とその表象：スカイドア，483pp
- 8) 榎原悟(1991)：谷文晁筆青山園莊圖藁・戸山莊図藁：国華(1148)国華社，29-39
- 9) 近藤壮(2006)：大名庭園『西園』と赤坂離宮—『赤坂御庭図』をめぐって：和歌山市立博物館研究紀要20 和歌山市立博物館，30-58
安永拓世(2006)：谷文晁筆『赤坂庭園五十八勝図』(和歌山県立博物館蔵)とそのまなざし：和歌山県立博物館研究紀要第12号，66-87
- 10) 中村光彦，浅羽英夫(1999)：紀伊藩徳川家江戸中屋敷における外部空間について：日本建築学会計画系論文集 第515号，219-225
- 11) 前掲注2，873
- 12) 前掲注10
- 13) 土居清健(1828)：鏡花水月：国華(178)(1905)国華社，201
紀府赤峰のみたち，西は嵯峨たる青山にとなり，東は漾々たる溜池にのそみ，北は四谷のたにたにをのそみ，南のかたは，山谷かさなりて，廻溪宛轉たり，市井紛華の境に咫尺すといへとも，おのつから幽閑にして
- 14) 馬場逸齋(1883)：紫園二十五絶：明治園芸史：日本園芸研究会，134
蓋此地，在東京最高之處，而自有高陵深谷，茂林絶壁，天造神護之所
- 15) 前掲注14，135
築臺樹以豁遠眺，設亭床以便小憩，好山入座，嘉樹當窓
- 16) 菊池純(1845)：西苑記：国文学研究資料館所蔵，3
斎後有楼……倚欄眺圖，外園老楓古松。翠紅相映。皆平視其梢。東南水雲縹渺。極目十里。芝浦品海。風帆沙鳥。往來出沒于香靄中。房嶺絳峰黛色如畫。最称奇觀。
- 17) 前掲注16，12
- 18) 前掲注13，205
小高く土をもちて，芝草をうえ，石の階段をつくり，其のうへに亭を立らる，額は井田主膳といふ人の筆なり，亭より西のかた，樅田原，青山の邊，はるかにみゆ。
- 19) 九庵庵(1828)：紀乃柴折：『国華』(179)国華社，13
登邱眺圖。青山良兌原諸村。茅舍白屋。煙火蕭條。點綴寒林夕陽之間。頗有倪黃畫致
- 20) 前掲注19，227
望雲亭 殊にめづりかなるは，家居をめくれるやうにつくれり，それは居なからに，家を押し廻らせて，四方の風景を，こころのままになかむるは，もつはらめづりかなる樂みにおほへぬ，やすらひを望雲亭といへり，十月や見る間にかはる山のそら
- 21) 林述齋：西園賞詩十六首：東京市史稿遊園篇第一(1929)：東京市役所，176
中有疎々洗枝處，剩看邸外萬人家。
- 22) 前掲注19，224
白妙の富士の高根を見渡しそここの山々見へわたらん
- 23) 前掲注13，202
西にあたりて富士の根，ときしらぬ雪をいただきて，遙望たくひあらし。
- 24) 前掲注19，225
- 25) 前掲注19，231
- 26) 前掲注19，231
- 27) 山本豊湖共昌(1790)：「西園図」：『東京市史稿』遊園篇第一：東京市役所(1929)，166
山本豊湖共昌の苑図なるものが『東京市史稿』遊園篇第一に言及されている。しかしこの「苑図」そのものは掲載されておらず，そこに記されている記事が載せられている。本文では「西園図記録」と記す。
- 28) 村尾正靖(1828)：紀伊赤坂御屋形御庭の記：嘉陵紀行第五篇：『江戸叢書』江戸叢書刊行会編(1980)，370
又一亭あり，望嶽と書たる額あり，ここにて西に顧見れば，松兩傍よりおひ，梢枝を交へたる間より，富士を見ると云，憾むらくは今日曇りて見えず，亭の前の根笹の中より笕をわたして，石の盥盤に水をかけらる，其かたはらにいと古き石の燈籠あり
- 29) 前掲注28，374
一徑攀亭雲樹重，身疑羽化此陪從，古松獻翠西窓月，谷口為門延士峯。正靖 此日暮天雲遮不見士峰，宴禮作画如共長松為門者是真景非摸索也。(句読点は筆者)
- 30) 前掲注19，231
向ひの壁のま中に，堅なかの窓をきりあげ，戸をつきあげぬるに，眞うけに，富士の峯の見えわたる
- 31) 前掲注13，206
西にあたりて富士の根，ときしらぬ雪をいただきて，遙望たくひあらし。
- 32) 前掲注16，16-17
長松離立挾路。攀而登百餘步，得望嶽亭。亭西南深林邃谷，坐視林梢，連岳突兀，露半身，白雪擎天，遠岫浮櫺，杳渺如畫。
- 33) 諸橋轍次(1955)：大漢和辞典巻九：大修館書店，857